アーチェリーの歴史

山口　諒
JPアーチェリー代表

弓と矢はいつ誕生したのか。1964年に出版された初期のアーチェリーガイドブックでは、スペイン半島の1万数千年前の壁画が最古の史実とされている[1]。20世紀、21世紀にも多くの考古学的発見があり、現在では、1983年から発掘調査が行われているシブドゥ洞窟(Sibudu Cave)で発見された7万年以上前の矢じりなどが最古のものとされている。考古学者の間では弓と矢は10万年以上前から使用されているとされているので、今後各地でさらに調査が進めば、この記録はさらにより古いものにされていくのでしょう。

ここでは、弓と矢の歴史ではなく、現在につながる**スポーツ**としての**アーチェリー**の歴史を書いていこうと思う。まず検討しなくてはいけないのが、「アーチェリー」と「スポーツ」という言葉だ。

「アーチェリー」とはなにか。日本ではこの言葉の定義はいささか混乱している。Archeryという英語はそのまま弓術を意味する。19世紀、エドワード・モースが弓術を、人類学的な文脈において、静的な取り掛けの形状(彼は取り掛けとリリースと混同している)によって分類した[2]。しかし、弓術は動的な技術体系である。彼が分類に用いたのは、博物館の彫刻や絵画であるので、弓術の切り取られたいち場面での分類を余儀なくされたのは仕方ないとしても、取りかけの形状から、どのような弓術か、どの筋肉で弓を引いたのか、どのような弓を引いたのか判別することは不可能である。

弓道という技術体系(武道)が成立する前、海外の弓は道具に過ぎなかった。元寇時にモンゴル軍が使用していた弓は福岡の元寇資料館に「モンゴル軍弓」として収蔵されている。しかし、和弓という道具が武道としての弓道として成立した後、アメリカのアーチェリーが道具としてだけではなく、射形・競技規則をともなった技術体系として国内に紹介されると、初期にこそ、アーチェリーは弓術と翻訳されたが[3]、日本独自の弓術の名称が弓道に移行した後[4]、対米対立・戦争の影響もあると考えるが、アーチェリーは弓術ではなく洋弓と訳されるようになった。

国内における競技団体である日本洋弓会が日本アーチェリー協会に改称し、国内でも洋弓がアーチェリーと呼ばれるようになったことで、アーチェリーとは洋弓であるとの認識が生じた。

以上の歴史的な経緯から日本におけるアーチェリーとはなにかを定義するならば、それは弓術ではなく、1930年代、菅重義によって日本に紹介された近代スポーツとしてのターゲット競技(的あて)における弓術であるといえる。

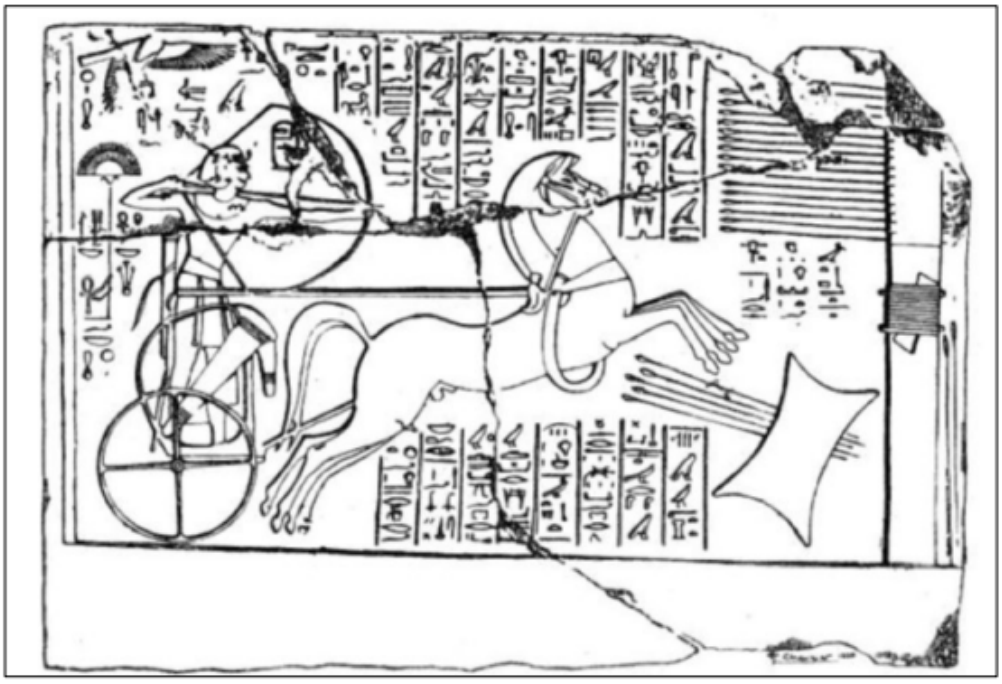
次に、「スポーツ」という定義だが、こちらはいささか難しすぎる。ここでは、近代スポーツの特徴として「世俗性」「平等性」「官僚化」「専門化」「合理化」「数量化」「記録への固執」をあげたグッドマンの定義[5]に加えて、近代スポーツとしてのアーチェリーに影響を与えたものも取り上げる。弓と矢は10万年以上前から存在する道具であり、近代以前においては、広義でのスポーツ的使用を余暇・競技・儀式・軍事訓練・狩猟訓練として分類することが非常に困難であるので、影響を与えたかどうかで切り分ける。

---

[1] 白倉仲助, 武山秀 共著,洋弓の楽しみ方 : レジャーを豊かに,西東社,1964, p82
[2] Morse, Edward Sylvester. "Ancient and modern methods of arrow-release." Essex Institute, 1885.
[3] 射覚 13(11), 大日本射覚院, 1938-11, P22-23
[4] 五賀 友, 松尾 牧. 「弓術」から「弓道」への移行時期とその理由に関する史的考察：学校弓道部の名称と出版物における語彙使用状況に着目して. 武道学研究. 2020;52(2):57-72
[5] Guttmann, Allen, 谷川, 稔ほか訳, スポーツと帝国 : 近代スポーツと文化帝国主義, 昭和堂, 1997

The Amenhotep II stela at Karnak Temple (ルクソール所蔵)

古来から使用された来た弓と矢を使用しての遊びは世界中に存在していたと考えられる。しかし、古いものでは7万年以上前の矢じりが発見されているので、弓と矢が使用されていたことを推測することはできるものの、どのように使用されていたのかわからない。軍事・狩猟目的ではない弓術としての最古の史料は紀元前1429年頃のメソポタミア文明(エジプト)の石碑である。



1929年の写し[6]

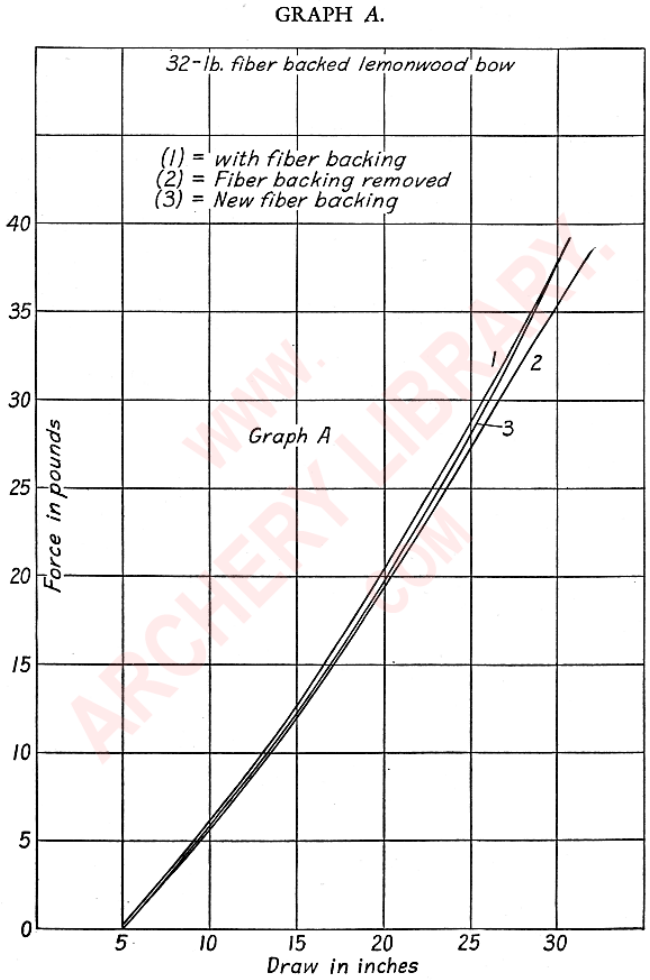
描かれているのはエジプトのファラオ、アメンホテプ 2 世が戦車に乗り、長方形の的に狙いを定めているところだ。紀元前5世紀のヘロドトスはその著書「歴史」の中でエジプトではファラオが国民を集め、王族の技量を披露するために賞品つきの競技大会(gymnastic

[6] Gimenez, F. Integration of foreigners in Egypt: the relief of Amenhotep II shooting arrows at a copper ingot and related scenes. "Journal of Egyptian History", 2017, vol. 10, núm. 2, p. 109-123.

games)を開催していたと書いている[7]。牛やコート、革などの賞品付きとはいえ、王族が主催し、王族が腕前を披露する競技大会が出場選手に公平であったとは考えられないが、競技としての弓術の初期の様子を窺い知ることができ、かつ、このような競技会があったことが、ギリシャの歴史家によって伝承されていったことには大きな意味がある[8]。

知られなければ影響を後世に与えることは不可能である。同時期の中国・周王朝(紀元前1046年頃 - 紀元前256年)でも比較的完成された弓術と弓射競技が行われていたが[9]、アーチェリーに影響を与えることはなかった。

このときどのような弓が使用されていたのかについては複数の材料を組み合わせた合成弓(コンポジットボウ)であったことが知られている。ここで弓の分類について検討したい。人類学、考古学では弓を形状や素材によって分類する[10]が、弓術を語るときには不十分である。ここでは弓を引いたときの「長さ(ドローレングス)」、その時の「強さ(引くのに必要な力)」と、弓の「硬さ」を分類に追加する。



fx曲線，Archery: The Technical Side(archer library版)より

弓の威力と性能はドローフォース曲線(fx曲線)と呼ばれるものと、弓の形状と素材によって定まる弓が何%矢にエネルギーを伝えられるかを示す効率性によって決定される。この

[7] Herodotus; Cary, Henry, Herodotus; a new and literal version from the text of Baehr, with a geographical and general index by Henry Cary, New York Harper, 1876, II.91
[8] Nikoleta G. Bratsi, Sports in Minoan Crete, Sparta, January 2013
[9] 黒須 憲, 松尾 牧則, 日本弓術における中国弓術の影響, 武道学研究, 2002-2003, 35 巻, Supplement 号, p. 42
[10] 片岡 生悟，縄文・弥生時代の弓矢について : 完形出土品を中心とした分析と考察: 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室, 2020, p67–86.

曲線ではx軸が長さ、y軸が強さ、この曲線を引いた長さで積分したものに、効率性を掛け算して定まるのが威力であり、曲線を微分した傾きはその弓の硬さ、つまり弓を1cm長さ引くと、どれだけ重さが増すかを示す[11]。

当時弓は石碑のように馬の戦車との組み合わせによって使用された。のちの騎射に用いられた弓にも見られる特徴だが、歩兵が使用する弓に必要な射程(飛距離)は、この場合射手自ら相手に向かって接近するので必要なく、100ポンドもする弓を使う意味はない[12]。接近戦においてすぐに射るため、引ききらなくても威力を得られる硬く弓で、移動する戦車の上という不安定な場所から射る必要があるので短い弓が最適である。記録としては短い合成弓としかないが、当時使用された弓はそれに加え、強くないが短距離では人間には殺傷能力がある40から60ポンド程度の硬い弓が使用されたと推測できる。

短弓(ショートボウ)の誕生

貴族が狩猟を余暇として楽しむようになるまで、弓を作る専門職人はおらず、手作りであった。1991年に アルプス山脈で発見されたアイスマンと呼ばれるミイラ化した遺体と同時に回収された5000年前の弓の長さは、所有者の身長が159～163cmであると推測されているのに対して、183.5cmもあるイチイ製のものだった。ヨーロッパ各地で発見された新石器時代の弓の強さは40ポンド～90ポンドであると推測されている[13]。引かれるとき弓は長いほど素材にストレスがかからず、簡単に作ることができる。子供の練習用、または、毒矢を使う狩猟法では弓が強くある必要がなかったので弱い弓として短弓はあったが、矢だけで殺傷できる強さの弓を短く作ることには高い技術が必要である。弓を短くする実利はない。

アイスマンの弓(© Südtiroler Archäologiemuseum/ - Harald Wisthaler. Harald Wisthaler. www.iceman.it)

紀元前1800年頃に登場した戦車を使用した新しい戦略のために、不安定な足場で使用するのに適した十分に強い弓が必要になり、弓術的な要請によってこの地域で短弓が誕生した(*)。弓が長弓と短弓に枝分かれしたのはこの頃だろう。

*日本では流鏑馬のように騎射にも長弓を使用するが、がっしりした大型の馬が開発されたのはこの時代から1000年以上先で、人間が安定して乗ることができる鐙が登場するのは更に500年先の話である。紀元前1800年と、日本で騎射が行われるようになる500年頃とでは状況は大きく異る。逆にそうであったがために、日本では弓を短くする動機がなく、長弓だけで済んでとも言える。

取り掛けの変化

モースは取り掛けをピンチ式、地中海式、蒙古式に分類した。現在の矢は精度が良いので、弦を引けば良いが、加工精度が悪い時代には弦だけではなく矢と弦を指で固定する必要もある。ピンチ式は両側から指で矢を、地中海式は片側から人差し指と中指で、蒙古式は親指と人差し指や中指で両側からはさむ。モースがなぜ地域名で分類をしたのかはっきりとしない。彼は自分の論文の中でアッシリア人やエジプト人の文化のもとで、この3つ

[11] C. N. Hickman, Forrest Nagler & Paul E. Klopsteg, Archery: The Technical Side,1947.
[12] McNeill, William Hardy, 戦争の世界史 : 技術と軍隊と社会, 中央公論新社 2014, p37
[13] Junkmanns, Jürgen / Klügl, Giovanna / Schoch, Werner / Di Pietro, Giovanna, Hafner, Albert: Neolithic and Bronze Age Archery Equipment from Alpine Ice-Patches: A review on Components, Constrution Techniques and Functionality. In: Journal of Neolithic Archaeology, 6.12. (2019)

の取り掛けは混合して用いられていたと書いている。実際、技術として優劣をつけることはできない。

ピンチ式は最も汎用的な取り掛けであらゆる状況で使用できるが、強い弓を引くには引く力だけではなく、指で弦を”ピンチ”する握力も鍛える必要がある。そのため、先進国でこの取り掛けが残っている文化はない。兵士が鎖帷子や鎧で防御をするようになり、この取り掛けでは攻撃に必要な強さの弓を引くことが困難になったのだろう。

進化した防具に対応する方法は2つしかなかった。一つは長弓をより強くすることで長距離からの殺傷能力を高める事。石器時代に40-90ポンドだった弓の強さは200ポンド近くまでに強くなっていく。よく多くの指で弓を引く地中海式の取り掛けはその要求を満たし、立射・長弓とともに進化していった。

もう一つは、紀元前900年頃にアッシリア人によって開発された騎射で、弓の強さを高める代わりにより相手に近づいて、近距離で射る事で殺傷能力を高める新しい射法である。馬上という不安定な状態で強い弓を引くことは困難であり、威力を高めるためにはより弓を長く引くか、弓の効率性を高めるため(*)に弓を短くするしかない。

*引き切ったときの弦と矢がなすの角度が小さいほど効率性は高まる

元寇資料館に保管されているモンゴル軍の弓の全長は64cmしかなく、張ればもっと短くなる。60cmとした場合、これを80cm引いたときの弦の角度は70度近くにもなり、とても地中海式のように3本の指で引くことは不可能である。蒙古式の特徴は指と弦の接点の短さで、親指一本だけで取り掛けることで、より短い弓を引けるようにした。

地中海式では弦はリリース後、体に向かってカーブを描いて戻っていく。そのために、より長く引くために頭の後ろや胸まで引くことは物理的にできない。古代ギリシャ人が実在を確信していたアマゾネス(女性)は胸まで弓を引いて射つために、その邪魔となる胸を切り落としていたとされた。これは彼らが地中海式を採用していた証拠となる。

一方で、蒙古式では弦は体の反対側を通っていくので、頭の後ろや胸まで引いたとしても体に弦が当たることはなく、長く弓を引ける。そのために騎射・短弓と相性がよく、ともに進化することとなった。

競技としての短距離アーチェリー

競技形式まで完璧な記録が残っているのは、紀元前8世紀にホメロスによって書かれた「イリアス」だ。この本は紀元前1700から1200年頃と考えられているトロイア戦争に関する口承をもとにしていると考えられているので、完璧な記録として扱うことができない。しかし、この本がその後ギリシャにおいて好れ、幼い子どもに暗唱させる教科書的な存在ですらあったことを考えれば[14]、間違いなく発表されて以降の弓術に大きな影響を与えた。近代スポーツとしてアーチェリーが生まれつつある18-19世紀にイギリスで書かれたアーチェリーガイドブックの多くは[15][16][17]、この競技をアーチェリーの始まりとして紹介している。

死者の魂を慰めるために行われた葬礼競技の一つとして行われた競技は現代のポピンジェイ(Popinjay)という競技に非常に似ている。この競技は1920年のベルギーオリンピックで

---

[14] 越川 茂樹, 『イリアス』における運動競技の存在様態とそれが醸す教育的内容, 北海道教育大学釧路校研究紀要, 2021, 53, P105-112
[15] Walter Moseley, An Essay on Archery, T. and T. Holl, 1792
[16] E. Hargrove, Anecdotes of Archery From the earliest ages to the year 1791, York ,1792.
[17] George Agar Hansard, The book of archery Рипол Классик, 1840

も行われた。ホメロスの記述によると、「砂浜に少し離れた場所に船のマストを立て、細い糸で鳩をマストの上に縛り付け、これを彼らの的とした(23章)」。射法としては別の章ではあるが「矢のノックを牛皮の弦の上に置き、ノックと弦の両方を胸に引き寄せ、矢じりを弓の近くまで引いた(4章)」とある[18]。

Archers in Avignon, 17th century.

この初期の記録された競技は古代ローマではそのままの形式が行われたが、その後、中世には本物の鳩ではなく、木製で作られた鳥が使われるようになった。「ポピンジェイ」という言葉は、オウムを意味するポルトガル語の「*papegai*」から来ている[19]。

このマストの上の鳥を射る競技に必要な技術は高低差シューティングである。そのため中世には城を攻める・守るための格好の軍事訓練となる。フランスでは924年に市民たち皇帝ハインリッヒ1世から市民防衛団を設置する特権を得て射撃協会を作った。競技形式は初期のマストから実戦に近いそれぞれの市民が住む地区の城を使って行われた。協会は日々市民に訓練を行い、年に一度の賞品付きの射撃祭を開催した。お祭りはその規模を広げ、1470年のアウクスブルグ射撃祭は1週間行われ、射撃競技だけではなく、競馬、350歩競争、助走あり幅跳び、三段跳び、45ポンドの石投げなどが同時に行われた。

都市によって開催された射撃祭には招待状が友好都市に当てられたが、その都市の城を使用する以上、招待状には賞品と正確な競技規則と競技条件が記されていた。身分ではなく、結果だけが重要だったので、賞品は上級貴族から都市民だけではなく、ほかの都市に

[18] Homer, Samuel Butler訳, The Iliad(English), 1898
[19] Erik Roth, With a Bended Bow: Archery in Mediaeval and Renaissance Europe, The History Press, 2011, p 167

住む者、下層民や農民にすら与えられた[20]。勝者は税金が免除されるなどの特権を得た[21]。当時競技としての馬上槍試合には家門証明が必要だったが、近代スポーツにおける「平等性」の概念を身分制限がないお祭りとして行うことで達成したと言える。10世紀の射撃祭は弓で行われ、その後12世紀頃にクロスボウが加わり、火縄銃も16世紀頃に加わった。ドイツでは1300年頃から射撃協会が結成され、同様の射撃大会が行われた[22]。

現在でもフランスやベルギーの各地で射撃祭は行われている。有名なものにル・ピュイ＝アン＝ヴレ(Le Puy-en-Velay)で行われている鳥の王の祭典(Fête du Roi de l'oiseau)がある。毎年9 月の第 3 週に行われ、10万人以上の人々が参加している[23]。これは16世紀にこの町で行われている射撃祭を復活させたお祭りである。一方で、継続する射撃協会の射撃祭は射撃大会、アーチェリー競技に大会になった。

現存する最古の射撃協会のひとつにフランスのアミアンボウカンパニー(Compagnie d'arc d'Amiens)がある。1117年頃に起源を持ち、射撃祭を18世紀まで開催していた。前述のように都市防御を担い、射撃祭で優勝したものには免税などの特権が与えられた団体であるため、フランス革命の影響で1790年に解散を命じられる。1803年に競技団体として再出発し、ポピンジェイを継続して行った。その後、フランアーチェリー連盟に加盟し、2012年には全仏ターゲット選手権が開催されている[24]。フランスでは革命がきっかけとなり、射撃団体は純粋な競技団体として再定義された。他の国でも民主化に伴い特権団体から競技団体になっていった。

射撃は野戦ではなく、城壁防御のための軍事訓練を兼ねていたため、フランス、ベルギーなどで行われていた競技形式は50フィート(約15m)から30m程度の高低差を射るもので、これを短距離アーチェリーとする。

クロスボウについて

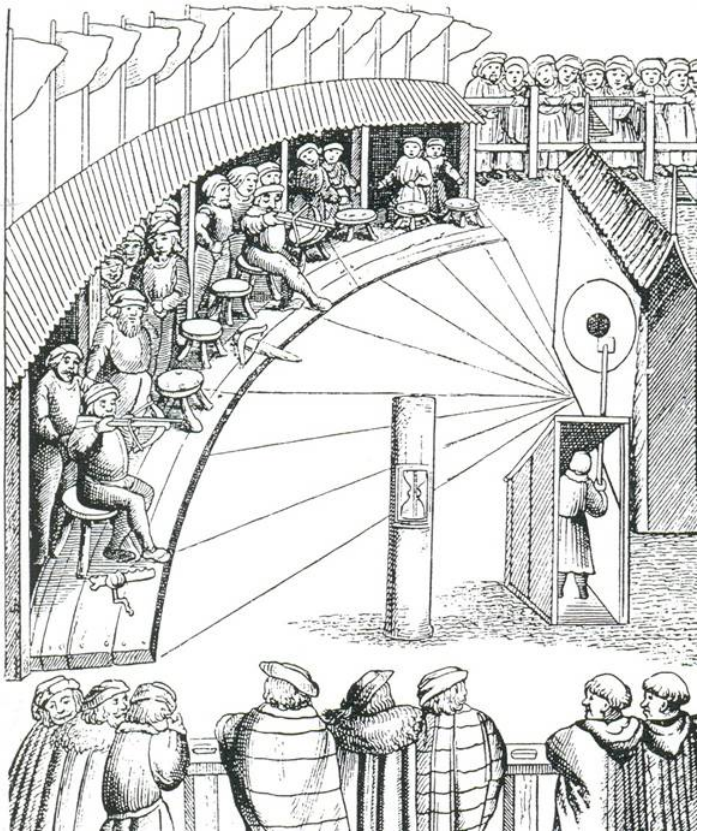
中世ヨーロッパでは11世紀頃からクロスボウが人気を博した。初期に広く採用はされたのはバルセロナやジェノバで、商船の防御のために用いられた。利点は何と言っても簡単に使用することができることで、訓練に時間を要しない。また、サイズが縦横に小さいので、船の中や塔の中のような高さはないが、奥行きはある空間での使用に最適だった[25]。欠点は発射速度としっかりした地面が必要だったこと。クロスボウに必要な技術は左右均等に引くこととトリガーをまっすぐ押すことである。どちらも慎重に行うことが必要だ。また、初期のクロスボウは足で弓を地面に固定して背筋を測定するような姿勢でコッキングした。そのために沼地では使用できない。クレシーの戦いでフランス軍のクロスボウ隊は大敗した理由として、前日の雨によって地面が沼になってしまったためとの研究もある[26]。

初期のクロスボウ競技はアーチェリー的な側面を持っていた。軍事訓練の意味も持った射撃祭は、現在のアーチェリー競技同様に的に当たることを重視した。クロスボウはロングボウに比べて遥かに弓自体が重く金属製の場合すらあった。当然、的中を重視した場合、シューティングポジションは座射となる。戦後、1956年にスイス・ドイツ・オーストリア・フランスの4カ国によってIAU(国際ボウガン射撃連盟)が結成され、クロスボウ競技が

---

[20] ヴォルフガング・ベーリンガー著、髙木葉子訳『スポーツの文化史：古代オリンピックから 21 世紀まで』, 法政大学出版局、2019, p 116-125
[21] Paul Delsalle, La Franche-Comté au temps des archiducs Albert et Isabelle: 1598-1633, Presses Univ. Franche-Comté, 2002, p 77
[22] K.ヴァスマンスドルフ著, 楠戸一彦訳, ドイツ中世後期のスポーツ，溪水社, 2022
[23] 公式サイト, https://www.roideloiseau.com/
[24] アミアンボウカンパニー公式サイト, https://www.cie-arc-amiens.com/
[25] Cte Albert de Bertier, V. Cordier et A. Guglielmini, Le Tir à l'arc, Hachette (Paris), 1900
[26] Ralph Payne-Gallwey, The Book of the Crossbow, New York : Dover Publications, 1995

再開されるが、競技形式として伝統的な座射ではなく簡易な立射を選択した。加盟国におけてるクロスボウの文化的な側面を考慮したかもないが、的中を最大の価値としていた中世競技とは違った形となっている[27]。また、中世当時の競技は「伝統スポーツ」として再現されるが、ショーとしての性質が強く競技と言えるほどの競技人口はない[28]。



Great shooting tournament at Zurich in 1504.
From “A history of Marksmanship” by Charles C Trench

弩（いしゆみ）競技（イタリア）

当時を再現したクロスボウ競技

[27] ボウガン射撃　上達への道案内　－入門編－, 1994
[28] 伝統スポーツ国際会議実行委員会 編, 21世紀の伝統スポーツ, 大修館書店, 1995, p 129

世俗化 - 宗教から脱却

古代において狩猟は生活の手段であったために、弓は宗教・儀式と深く結びついていたと考えられる。イリアスで描かれた弓術競技では優れた射手であったテウクロスは神アポロンに祈らなかったために的を外し、神に祈ったイードメネウスが勝利したという記述がある。聖書にも弓は登場し、ヨハネの黙示録では勝利の象徴とされている[29]。

しかし、1097年のラテラノ教会会議でクリスチャンに対しての弓の使用がローマ教皇ウルバヌス2世によって非難され[30](*)。その後、1139年に1000名以上の聖職者が参加した第2ラテラン公会議にて公布された30条のカノン(教会法)でアーチェリー(羅:sagittariorum)とクロスボウ(羅:ballistariorum)によるクリスチャンの殺傷を禁止し、使用したものは破門するとした[31]。同様に騎馬試合もこのとき禁止された。

*ローマ・カトリックの司祭でドイツの神学者であるカール ヨーゼフ フォン ヘーフェレはその著書でこれは戦争ではなく、売春婦も参加した世俗的な射撃祭に対する禁止であると意見しているが、根拠は示していない[32]。

議事録が残っていないため、禁止された理由は諸説ある。騎馬試合と同様に十字軍に集中させるためという主張もあるが、クリスチャンに対してのみ禁止され、異教徒への使用が認められた理由として、弓の進化による威力が増大し、騎士にとって驚異となったことが原因とする主張もある[33]。

十字軍でのクロスボウの活躍によって、12世紀のイタリアでクロスボウの人気が急上昇した。当時の進化したクロスボウは鎖帷子に対しても十分に殺傷能力があり、騎兵を倒せた。しかし、クロスボウは馬上ではコッキング(引いて固定する作業)できず、騎兵ではなく、歩兵の武器だった。歩兵は騎兵よりも圧倒的に身分が低く、歩兵(市民)が騎兵(貴族)を殺傷させる行為を忌諱したと考えられる[34]。

実際、モデルとなった人物の存在は示唆されていても、実在が確認できないので物語とするが、14世紀頃のロングボウを使用したロビン・フット、クロスボウを使用したウィリアム・テルはどちらも反権力的な物語の主人公であり、弓は権力者の武器ではなかった。

カノンの中で弓術は「羅:mortiferam(致命的)」であるとされた。ヨーロッパの貴族は刃物を名誉的な武器として選択肢した。騎士道的な精神性もそこにはあるが、実利として、相手を落馬させて手加減することで技量の高さ・度量の広さを示し、また相手が貴族なら殺さずに捕虜とすることで身代金を得ることができた。それに対して、相手の身分関係なく、無差別に相手を死傷させる矢は無慈悲な武器として非難されたのだ[35]。

禁止令ののち、「神が忌み嫌う」アーチェリーとカトリック教会との関係が薄れたが、クリスチャン以外には使用できたので教会としても所持は禁止しなかった。アーチェリーは国内では狩猟やスポーツとしてのみ使用できるというユニークな道具になり、アーチェリーとクロスボウの規制・管理は国家に委ねられ、国によって異なっていく。

---

[29] 新約聖書, ヨハネの黙示録 6:2
[30] Karl Josef von Hefele, Histoire des Conciles (Livre 31e : conciles sous le pontificat de Grégoire VII - Livre 32e : de la mort de Grégoire VII au concordat de Worms et au IXe concile œcuménique - Livre 33e : conciles du IXe concile œcuménique au conflit avec les Hohenstaufen, 1124-1152), t. V, partie 1, 1912, p.455
[31] 藤崎 衛ほか, 第一・第二ラテラノ公会議（1123、1139年）決議文翻訳, クリオ, 2018, 32, p.61-80
[32] Karl Josef von Hefele, 前掲書, p 733
[33] トマス・J. クローウェル, 戦争と科学者: 世界史を変えた25人の発明と生涯, 原書房, 2012, p80-81
[34] Oman Charles, The Art of War in the Middle Ages A.D. 378-1515, London Methuen, 1898, p.354-355
[35] バート・S・ホール, 火器の誕生とヨーロッパの戦争, 平凡社, 1999

ラルフ・ガルウェイは著書で1189年から1199年にかけてイングランドで弓のクリスチャンへの使用が再開されたと書いている。同じく1139年の公会議で教会によって禁止された騎馬試合が国王のリチャード 1 世によって1192年に再び許可されたので、この時期に弓の使用も再開されたとするのは妥当だろ。だが皮肉なことに、彼は1199年にクロスボウによって負った傷で死亡する。この死について、いまだ弓の使用を禁止している教会に背いた天罰であるとの考えがあるが、弓が再度禁止されるには至らなかった[36]。

イングリッシュロングボウの登場

紀元前からあらゆるタイプの弓が戦争や狩猟で武器として使用されてきた。しかし、キリスト教文化圏では4世紀頃から文献に戦争で使用された弓の記述が減っていく。鎖帷子や盾の進化によって、弓は武器としての有効性を失っていった。ただし、異文化との戦争では活躍した。

ベリサリウス将軍の法律顧問として戦争に従軍ししたプロコピウスによって6世紀に書かれた「戦史」によると、ペルシャ戦争と戦いで「ペルシャ兵はほとんどが弓の名手であり、非常に早く射つ事ができた。しかし、弓は弱く張られていたので、コルセットや鎧、盾に当たって矢が折れローマ兵を傷つけることができなかった。ローマ兵はいつも遅い、しかし、弓は強く張られているので、ペルシャ兵よりもはるかに多くの敵を倒した。その矢の威力を阻む鎧がないからだ」と書いている[37]。

ジャン・ド・ジョワンヴィルによって書かれた「THE MEMOIRS OF THE LORD OF JOINVILLE(王の記憶)」でも、第五次十字軍(1217-1221)でサラセン軍が十字軍のクロスボウを脅威として避けていたという表記があり、20箇所以上クロスボウについての記述がある[38]。

ロングボウは辞書では長い単一素材を用いたセルフボウであると定義されることが多い。だとすれば、どのような時代にもあったはずだ。アイスマンの弓もロングボウの定義に当てはまる。イングリッシュロングボウとは何か。新石器時代のロングボウの強さは40-90ポンドの強さと推定されているが、1545年に沈没したメアリーローズ号から回収されたロングボウは研究によるが、65-160ポンド、または、95-165ポンドとされている。2004年に更新された人間が引いたロングボウの強さの世界記録が200ポンドであることを考えると、イングリッシュロングボウは中世の防具に対抗するため、訓練を受けた人間でやっと引けるほどの強さを持つロングボウであると定義できる[39]。

このタイプのロングボウがいつ登場したのか特定することはできないが、弓に十分な強さがあれば盾や鎖帷子に対して有効だとイギリス軍(イングランド軍)が知ったのは1066年のヘイスティングズの戦いだった[40]。この時の弓はイギリスと戦ったノルマン人の主要な武器だった。この戦いについて書かれたタペストリーを見ると、弓を耳までではなく、胸まで引いている姿を確認できる。この引き方は立射ではなく移動しながら引くときの射法である。また弓のサイズもロングボウと呼ぶにはすこし短いが、国王ハロルド2世が矢に射抜かれ戦死した。

---

[36] Ralph Payne-Gallwey, The Crossbow, Mediæval and Modern, Military and Sporting, Longmans, Green and Company, 1903, p.3-4
[37] PROCOPIUS, HISTORY OF THE WARS, BOOKS I AND II WITH AN ENGLISH TRANSLATION BY H. B' DEWING, London S. Heinemann, 1914-40, p169-171
[38]Jean Joinville, The memoirs of the Lord of Joinville : a new English version, London : J. Murray, 1906
[39] https://www.guinnessworldrecords.com/world-records/heaviest-longbow-draw-weight
[40] Taylor, Rosalind M. "The longbow in English history." (1932), P.9.

バイユーのタペストリー(抜粋)

34年後には国王ウィリアム2世が狩猟中に矢に当たって死亡したが、次に即位したヘンリー1世は弓の練習中に起きた負傷・死亡事故を免罪する法律を制定した[41]。さらに99年後の国王リチャード1世はクロスボウによって負傷し、10日後にその傷が原因で死ぬが、リチャード1世はその傷を負わせた敵の兵士を許し金銭を与えた。こうして、他国では平民が使用する卑怯な兵器とされていた弓が、イギリスでは異なったものとして認識されるようになっていく。15世紀のフランス外交官で作家でもあったフィリップ・ド・コミンズは回想録でイギリスではアーチャーは花形であると書いている[42]。

1252年にヘンリー3世紀は16から60歳までの市民(自由民)に弓と矢の所持を義務付け、1275年のウィンチェスター法で所有する土地と財産によってより明確に定義され、1623年に廃止されるまで続く。所持だけではなく休日に訓練をするよう命じる法律も度々公布された。

15世紀に書かれたクレシーの戦いの図(抜粋)

[41] Erik Roth,前掲書, p 120
[42] Commynes, Philippe de, Mémoires de Philippe de Commynes. T. 1 , A. Picard et fils , 1904, p 32

1346年のクレシーの戦いではロングボウの大活躍でイギリス軍は3倍の兵力があったフランス軍に対しての圧倒的な勝利に終わる。強い”だけ”のロングボウを使用した作戦をフランス軍が模倣しなかった理由は貴族的認知にあったとされる。平民によって構成されるロングボウに貴族騎士が大敗したとは考えなかった[43]。

クレシーの戦いではイギリス軍の騎兵は下馬して戦った。弓兵を訓練するのに十分な時間があった10年後に行われたポワティエの戦いでフランス軍はロングボウ隊を模倣するのではなく、騎兵が下馬して戦うことを模倣したが、この戦いでさらに大敗し国王が捕虜になった。これによってフランスの政治自体が混乱に陥った。百年戦争とまとめられる一連の戦いは、終盤に大砲の登場、リシュモン大元帥によって編成されたフランス砲兵隊がイギリスロングボウ隊を圧倒しフランス軍の勝利に終わる[44]。そのため、フランス軍は最後までロングボウを使用しなかった。

現代の軍事研究において、これらの戦いは再評価され、ロングボウという弓の圧倒的な武器としての優位性による勝利ではなく、騎兵と歩兵の連携と指導者の優れた統率によるものであるとされるが[45]、中世のイギリス国民は現代の軍事研究家ではない。ロングボウに対する王族の庇護と、対外戦争でイギリスにもたらした圧倒的な勝利という結果によって、強いロングボウはイングリッシュロングボウとしてイギリスの象徴となった。

Royal Company of Archersの紋章

エリザベス1世の家庭教師で王家に仕えた教育学者のロジャー・アッシャムによって1545年に書かれ、ヘンリー8世に捧げられた「Toxophilus(弓の愛好家)」は最初の英語によって書かれたロングボウの本である。その中で著者は「英国人のために、英語で、英国の問題について書く(I have written this English matter, in the English tongue, for Englishmen.)」とした。その後19世紀まで10冊以上のガイドブックが、この本に触れながら英語によって書かれる。1822年にはアーチェリー団体「Royal Company of Archers」がスコットランド君主の近衛兵に任命される。既に火器の時代であり、ロングボウ隊は警護ではなく象徴として任命された。

---

[43] Charles Oman, The Art of War in the Middle Ages A.D. 378-1515, Oxford, 1885, p105
[44] J.P.エチュヴェリー 著, 大谷暢順 訳, 百年戦争とリッシュモン大元帥, 河出書房新社, 1991
[45] C.J..ロジャーズ, イギリスにおける14世紀のＲＭＡ, 軍事革命とRMAの戦略史, 芙蓉書房出版, 2004

現代のイングリッシュロングボウ

戦争で使用される長距離兵器が火器に移行するにつれ、弓は戦争武器としての価値を失っていくが、狩猟武器としては使われ続けた。狩猟には強い弓も飛距離も必要がない。獲物にもよるが40mほどが狩猟の限界と言われている。これは命中率の問題ではない。矢が秒速60m程度であるのに対して、音は340m/秒で伝播する。40m先の場合、音は約0.1秒で伝わるが、矢が届くのは0.7秒後となる。動物の反応限界は0.2秒程度であるとされている(*)ので、40m先では動物に気づかれてから0.4秒の猶予が生じ、鹿などの反応速度が早い動物は逃げてしまうかバイタルエリアから矢がそれてしまう。

*陸上ではスタートの合図のあとであっても0.1秒以内に反応した場合はフライングとされる。

アメリカのポープ&ヤング ハンティングレコードブックによれば、アメリカで一般的な獲物であるオジロジカ(ホワイトテイル)を狩った平均距離は19ヤード(17m)で40ヤード(36)を超える記録は5%未満である[46]。

200ポンド近い強さは狩猟に適さないため、19世紀頃にはイングリッシュロングボウの強さは狩猟に必要な40～70ポンドまでに低下していくが、イギリスに勝利をもたらした象徴としての地位は失われなかった。現在ではもはや弓の強さではなく、トラディショナルな形状であるかによってイングリッシュロングボウであるかが判断されている。

[46] https://www.bowhunter.com/editorial/huntingtips_shot_distance_on_deer0410/183461